

三康文化研究所

研究員

オススメ本コーナー

第12回 研究員のオススメ本紹介コーナー

〈浄土教の種々相〉

今回ご紹介いただいた三康文化研究所研究指導員はこちら！



林田 康順 (はやしだ こうじゅん)

専門分野:法然浄土教・浄土宗学・日本浄土教

2024年は浄土宗開宗850年であることから第1回公開講座では『浄土宗開宗850年慶讃 浄土開宗の文-二祖三代の伝灯を仰いで-』の題目で講演されます。公開講座に先駆けて、オススメ本をご紹介いただきました。



浄土教の種々相

富島義幸氏著『平等院鳳凰堂：現世と浄土のあいだ』  
(吉川弘文館、2010年刊)

世界遺産・宇治平等院。平等院庭園、鳳凰堂内の阿弥陀如来像・雲中供養菩薩像等、一連の境内整備事業とそれに付随した調査に伴う、平等院鳳凰堂をめぐる近年の研究成果の進展はめざましいものがある。中でも、富島義幸氏著『平等院鳳凰堂』(請求記号:186.1-To57)は、富島氏が本来のフィールドとする美術史的・建築史的視点にとどまらず、広く史学や仏教学等、周辺諸学の研究成果をも取り込んだもので、今後、平等院鳳凰堂を考察するにあたっては必読の論考といえよう。

『平等院鳳凰堂』は、鳳凰堂の内蔵は、従来指摘されてきた鳳凰堂壁面に描かれた九品往生の絵画表現に加えて、仏後壁前面図と共に本尊阿弥陀如来像および雲中供養菩薩像とをあわせて、立体的に中品下生の阿弥陀仏来迎の世界を構成しており、それによって九品往生全体が現出することとなし、さらに、鳳凰堂の空間全体は、密教修法の一つである阿弥陀法の本尊である阿弥陀如来像を「中心」として、阿弥陀如来の来迎、そして極楽浄土での化生という、極楽往生のプロセスを疑似体験する場であった(同書179頁)と結論づけている。



『浄土教の種々相』  
平等院鳳凰堂について

平安時代中期以降に流行した浄土教は「阿弥陀如来を信じて念仏を唱えれば、死後極楽浄土にいける」という教えを説きました。そこで、阿弥陀如来を祀る阿弥陀堂が必要になり、阿弥陀堂の建立が相次ぎました。

1052年 藤原道長(966-1028)の別荘であった平等院を、その子であり、時の最高権力者、関白藤原頼道(992-1074)が寺院にしました。

1053年 藤原頼道によって平等院鳳凰堂(江戸時代初期から使用されている名称、正式には阿弥陀堂)が建立され、阿弥陀如来像が供養されました。



# 浄土教の種々相

富島義幸氏著『平等院鳳凰堂：現世と浄土のあいだ』

(吉川弘文館、2010年刊)

世界遺産・宇治平等院。平等院庭園、鳳凰堂内の阿弥陀如来像・雲中供養菩薩像等、一連の境内整備事業とそれに付随した調査に伴う、平等院鳳凰堂をめぐる近年の研究成果の進展はめざましいものがある。中でも、富島義幸氏著『平等院鳳凰堂』(請求記号:186.1-To57)は、富島氏が本来のフィールドとする美術史的・建築史的視点にとどまらず、広く史学や仏教学等、周辺諸学の研究成果をも取り込んだもので、今後、平等院鳳凰堂を考察するにあたっては必読の論考といえよう。

富島氏によれば、鳳凰堂の内部は、従来指摘されてきた鳳凰堂壁扉に描かれた九品往生の絵画表現に加えて、仏後壁前面図と共に本尊阿弥陀如来像および雲中供養菩薩像とをあわせて、立体的に中品下生の阿弥陀仏来迎の世界を構成しており、それによって九品往生全体が現出することとなるとし、さらに、鳳凰堂の空間全体は、密教修法の一つである阿弥陀法の本尊である阿弥陀曼陀羅を表現していると捉え、鳳凰堂を含む平等院全体を「リアリティをもって極楽浄土の観想、阿弥陀の来迎、そして極楽浄土での化生という、極楽往生のプロセスを疑似体験する場であった」(同書179頁)と結論づけている。

「浄土三部経」の世界観を究極とする法然上人の浄土宗立教開宗以前の浄土教の様相を学ぶためにもお勧めの書である。

## 目次

### 鳳凰堂をめぐる五つの謎—プロローグ

- 1 鳳凰堂の建築美
- 2 鳳凰堂の内なる世界
- 3 現世と浄土をつなぐ景観
- 4 鳳凰堂と阿弥陀来迎
- 5 鳳凰堂本尊と阿弥陀法
- 6 阿弥陀堂と九品曼荼羅
- 7 阿弥陀曼荼羅としての鳳凰堂

### 新しい造形論にむけて—エピローグ

(林田康順)

※三康図書館所蔵資料に請求記号を付与